

「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいている大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

### 大祓と茅の輪くぐり

例年、六月三十日と一二月三十一日には「大祓」の行事があり、境内で「大祓詞宣読」に続き、「茅の輪くぐり」をしてまゐりました。

しかし、昨年よりウイルス蔓延の状況を考慮して、皆様にご参集いただいていたの行事を中止しました。本年六月も、集団での行事は見合はせる予定ですが、茅の輪は境内に設置し、「大祓の人形（ひとがた）」の配布もさせていただきますので、各自で個別に「茅の輪くぐり」をお済ませ願ひます。

「大祓の人形」をお納めの皆様には、「茅の輪守り」を授与させていただきます。

そもそも「茅の輪」の謂はれは、素戔嗚命が蘇民将来に疫病よけの護符として教へたものと伝承されますが、古代からかうした伝承を共有するかたちで、流行病に人々は協力して対処してきたのでせう。

現代にあっても「祈り」と「実践」を一人でも多くの人が共有することで、悪疫を克服することができますのではないのでしょうか。

年末までには、大勢の皆さんが集合しての「大祓」行事ができることを念じ、皆々様のご健勝を御祈念申し上げます。

(写真) 明治初期の鶏卵印画紙に着色した千代本ほか瀬戸橋際の料理屋の写真。東屋については二・三面に記事。

### 令和三年祭事曆

- ◎ 一月 一日 歳旦祭  
鶏鳴神事
- ◎ 二月 三日 天長祭
- ◎ 三月 二〇日 春季大祭  
祈年祭・合祀神例祭
- ◎ 四月 二九日 昭和祭
- ◎ 五月 一五日 例大祭  
神社本廳献幣使参向  
琵琶島弁天社へ神輿渡御
- ◎ 六月 三〇日 大祓式  
大祓人形納め・茅の輪神事
- ◎ 七月 四日 天王祭出御祭  
本社神輿御霊入・宮出渡御
- ◎ 七月 六日 三つ目神楽  
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 七月 一日 天王祭巡幸祭  
天王神輿町内巡幸
- ◎ 七月 一八日 手子神社例祭
- ◎ 九月 一日 浅間神社例祭
- ◎ 九月 一七日 熊野神社例祭  
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 一〇月 一七日 手子神社秋祭  
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 十一月 三日 秋季大祭  
新嘗祭
- ◎ 二月 八日 歳の市  
開運熊手授与
- ◎ 二月 三二日 大祓式  
大祓人形納め・古札焼納式
- ◎ 毎月 一日 月次祭

# 「東屋」・「総宜楼碑」と徳川慶喜

毎年五月十五日の例祭には「おわたり」といって、御本社のご祭神が御神輿で琵琶嶋(弁天島)に向かれ、琵琶嶋神社前で神事があります。

この琵琶嶋神社の横に石碑があります。これが「総宜楼の碑」です。この石碑はもと「東屋」といふ料亭の庭にありました。

東屋は「江戸名所図絵」にも描かれてみますが、瀬戸橋の西側(瀬戸町内側)にありました。安政の大火の後、洲崎に移転しました。伊藤博文が憲法草案を練るために宿泊したといふのは洲崎の東屋となります。戦後、廃業しましたが、碑は痛んだ部分を修復して琵琶嶋に移され今



日に至ります。

江戸時代の漢詩人として名高い大窪詩佛が文人達とともに東屋に宿泊し、ここを「四時総宜之樓」と名付け、扁額を掲げました。文化三年(一八〇六)春のことです。「江戸名所図会」に描かれた東屋の二階の軒下にはこの扁額があります。

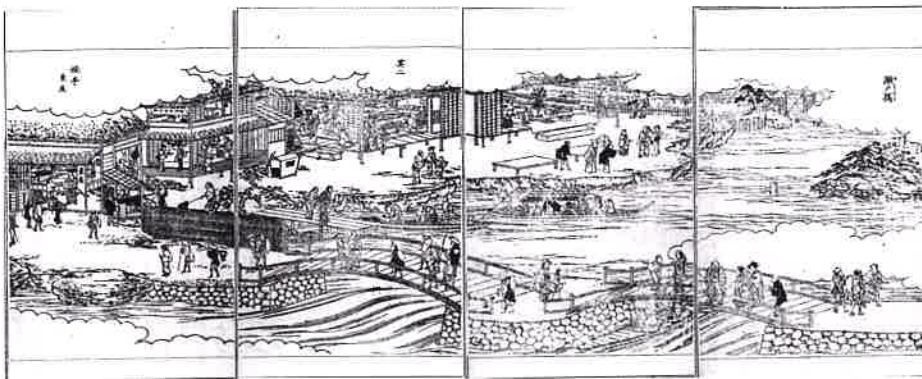
秋に詩佛はまた八景に來訪します。同行者は佐波淡齋ほか六名の詩人や絵師などです。

佐波淡齋は桐生の絹商人で漢詩人でもあります。この時に淡齋が作った詩を、詩佛が書き、江戸の石工で名高い廣群鶴に彫らせたものがこの「総宜楼の碑」で、東屋の庭に置かれました。

詩の内容は、銀の鱸や紅の蟹が目にも美しく、さらに良い地酒もあつて鯨飲するほどに酔い潰れてしまつたが、夜半の雨の音か聞いて眼をさますと、瀬戸橋の下を流れる退潮の潮の響であったと知って、たちまちに詩ができてゐたといふ

やうなものです。

豪商であり、詩人でもあり、書画工芸のパトロンでもあつた佐波淡齋のやうな風流人が、たびたび金沢八景に來訪してゐた



## 朝比奈町鎮座 熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひます。仁治二年(二二四二)、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年(二六九五)、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結果して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拝殿を建築竣功して今日に至つてゐます。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのつとつた湯立神楽が今も続けられています。



のです。

瀬戸神社に大給馬その他を奉納してゐる神田佐久間町の森川五郎右衛門もさうした豪商であり文化人でもあった人でした。

森川五郎右衛門が谷文晁と酒井抱一に描かせた孔雀牡丹図と秋草花卉図を佐波淡齋が譲り受け菩提寺の浄運寺に奉納したものが現存してゐます。両者の交際があったことが知られます。

◎

幕末に東屋を訪れた著名人に徳川慶喜があります。水戸徳川家から一橋家の養子になった慶喜の行動を記した「慶喜公御言行私記」にその経過が残つてゐます。

巳年五月十八日とありますから安政四年(丁巳・一八五七)のことです。武州金澤まで「遠馬」をすることとなりましたが、慶喜公は馬術は上達されてるので、払曉に出発されれば十分なのだが、お供の者に未熟なものもあるのです、早めの前夜八つ時(午前二時)に出発されました。芝あたりで小雨が降り始め、次第に強くなってきました。

保土ヶ谷にて夜も明けました

が、雨休みもせず、金澤まで六里は坂や峠で泥濘がはげしいので、馬でなく徒歩でゆくことになりました。

金澤に到着すると、勝景御遊覧の間はしばし雨も止んでいたのですが、お弁当所の「東屋」に着くとまた降り出し、さらに強雨となつて、このあと夜にかけては暴風雨となり、帰り道の大森・高輪あたりでは路上に波浪が打ち上げる状況であつたということです。

「東屋」でお弁当の時に、家臣たちは、既に御遊覧は済んでをり、保土ヶ谷までは駕籠で行かれるよう進言したのですが、駕籠に乗るようでは講武の意もむなしくなり本意に背くとおっしゃり、家臣ともども徒歩で保土ヶ谷に向かいました。保土ヶ谷からはまた乗馬ですが、御家老にはそこでお供御免勝手次第に帰るように申しつけ、公は暴風雨の中を「下の帯」までお濡らしになって、夜四つ時(午後十時)にご帰館になられたといふことです。

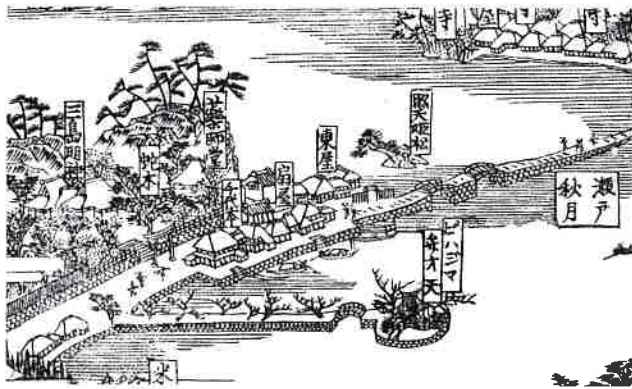
お弁当の前に勝景御遊覧とのことですから、九覧亭や琵琶嶋

をご覧になり、そして瀬戸明神参詣もされたでせう。

このやうに江戸時代の後半には、侍も町人も含めて、金沢八景を訪れる人が多かつたのです。

「東屋」「千代本」「扇屋」と三軒の料亭があつたことが当時の絵図に表されてをります。

右ページの図は「江戸名所図会」の瀬戸橋・東屋。左は「武昌金澤八景之図」(金龍院蔵版)の部分。



### 谷津町鎮座 浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の來訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まつた中で当地にも勧請されたものでせう。ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かつたと伝へます。御祭神が天孫瓊瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭(近くの土日曜)には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年(一四六三)西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあつたといふことです。

### 瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起原で、今から千五百年以上も前（古墳時代）のことです。

治承四年（一一八〇）鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの靈域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にも信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県神社廳幣使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年の屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修宮事業が行われました。

### 御祭神

大山祇（おほやまつみ）の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。  
須佐之男（すさのを）の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追ひ祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれてゐます。七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

### 菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもごらつしやいます。

### 「あじさい詣」と「夏詣」

五月から瀬戸神社境内の紫陽花が見頃になります。日本の原産である「ヤマアジサイ」を中心に約百二十種をご覧いただけます。この時期にご参拝され、御朱印をお求めの皆様には「あじさい神苑」のスタンプを捺させていただきます。

また、夏から立秋前日まで「夏詣」のスタンプの捺印となります。京急沿線を始め、各地の神社においても「夏詣」のお詣りを受け付けてをります。



夏詣

### 瀬戸神社

〒三三六-0027  
横浜市金沢区瀬戸十八-14

電話 〇四五-一七〇-一九九九-一

(FAX) 〇四五-一七〇-一九九九-四

http://www.setujinja.or.jp

### 釜利谷町鎮座

### 手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとこの地の領主伊丹左京亮が、文明五年（一四七三）瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年（一六八〇）、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智樂院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加えました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日（現在はその後の日曜日）ですが、十月十五日（前後の日曜日）の秋祭りには、古式豊かな湯立神楽が昔ながらの伝統を守つて行われます。

境内の洞窟にお祀する竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されてあります。